

TRANSITION TO HEALTH (080)

“ 新型コロナウイルス感染 ⑥ ”

～ 特効薬 は “ 自己免疫力 ” ワクチン や 抗ウイルス薬 ではない ① ～

はじめに

外交評論家・元首相補佐官の岡本行夫氏（74歳）が4月24日に新型コロナウイルスによる肺炎のため亡くなられていたことが報じられた。5月13日には、大相撲の三段目力士・勝^{シノブ}武士さんが28歳の若さで多臓器不全で亡くなられた。彼は糖尿病の持病を抱えていたという。今「緊急事態宣言」が解除され、6月から学校での授業も再開されるという。今年の秋冬は、インフルエンザと新型コロナ（第2波・第3波）の同時流行が危惧され、メディアは「今年はインフルエンザワクチンをきちんと打ちましょう！」とワクチンの接種を勧めている。有効で安全なインフルエンザワクチンがあればいいのだが、残念ながら、未だに、有効で且つ安全なインフルエンザワクチンは開発されていない。

「インフルエンザワクチンの危険性・無効性」を示す事実は、まだまだある

★ 多くの医師・研究者がインフルエンザワクチンの危険性を訴えてきた

今まで（1970年代～2015年）、世界中の多くの医師・研究者らが実名で「ワクチンを打つと、感染症が爆発的に増大する」「予防接種は、病気や健康被害の“いちばん大きな原因”になっている」「強制予防接種が天然痘、ポリオ、インフルエンザの流行を招いていた」「ワクチンは病気拡大の時限爆弾である」等々と訴え続けてきた。

また、科学誌「SCIENCE」も、1977年3月4日「インフルエンザやポリオの生ワクチンは予防すべきはずの病気を逆に生み出している可能性がある」と論じていた。この記事の掲載は、米国のCDC（疾病予防管理センター）とNIH（国立衛生研究所）が調査のために来日する2年前、前橋市の一児童のワクチン事故が発生する2年ほど前のことである。

★ 日本ではウイルス学会が「ワクチン無効」を認め、米国では医師・看護師が接種拒否

日本のウイルス学会でも、1981年、学会長が「ここにいるウイルス学者で、インフルエンザワクチンが効いていると思っている学者は一人もいないだろうが・・・」と開会の挨拶をしたといい、この学会の結論は ①「ワクチンは無効」 ②「流行予測は不可能」であった。前々号で「・・・今までインフルエンザワクチンが効いていたという感触はない・・・」とおっしゃっていたノーベル生理学・医学賞の本庶佑先生のコメントを紹介したが、私のみならず、皆さんの多くも「効いていない」

インフルエンザワクチンに関するラウンド・テーブル・ディスカッション（1981年）

ウイルス学会の会長
石田名香雄先生の有名なご挨拶

「ここにいるウイルス学者で、インフルエンザ・ワクチンが効いていると思っている学者は一人もいないだろうが・・・」

学会の結論

- ① ワクチンは無効
- ② 流行予測は不可能

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原 6丁目 8番 1号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

と感じていることでしょう。私は「インフルエンザワクチンを打っておいて良かった」という人に一度もお目にかかったことがない。「ワクチンを打った時は酷かった」「ワクチンを打った年だけインフルエンザに罹ってしまった」「・・・だから、もうワクチンは打たない！」というマイナスの話ばかりを聞く。「効きもしない危険なインフルエンザワクチンを毎年打っている人は感染しやすく、症状も辛そうだ」と実感しているのだが、今、メディアを通して『社会的予防論』をかざし、「周りの高齢者・免疫弱者にうつさないためにも、ワクチンを打ちましょう」などと、**重大な副反応の危険性**には触れず、歴史に学ばず、科学者・研究者の忠告に耳を傾けないコメンテーターがいることは、非常に残念である。

右図の円グラフは『Vaccine Safety Manual』に掲載されているもので、2006年2月の『季節性インフルエンザワクチンの接種を受けますか?』との質問に対し、米国の医師・看護師の**70%**が『**NO**』と答えていたというものである。この3年後(2009)に新型インフルエンザ(A/H1N1)騒動が起こっているため、今ならば、100%に近い医師・看護師が『**NO**』と回答するのではなからうか。



★ 静岡にもあった！ ワクチン接種で、院内感染拡大

ワクチン接種の失敗例として、**1976年米国の「フォード大統領の失脚に繋がった」と**いわれる大失敗(前々号)。**2003年米国**での「**CDCのワクチン接種勧奨直後に起こった5歳未満の死亡児の激増**」という失敗(前号)。そして**2009年**の新型インフルエンザ・パンデミック騒動の時の「**ワクチン接種を受けた人からの感染拡大**」という失敗について紹介した。最後の2009年の失敗に関しては、なぜか日本ではあまり認識されていないようである(情報封鎖?)。

実は、ワクチン接種の失敗・無効を証明したはずの事件が静岡でも起こっていた。**2014年**の**年末**、静岡市内のS総合病院で、予防接種していたにもかかわらず、入院患者・病院職員**183人**がインフルエンザに**集団院内感染**し、**高齢**の患者さん**2名**が**死亡**していた。このとき、タミフルの予防投与も行っていたという。やはり、ワクチン・抗ウイルス薬に頼りきるのは危険であったわけで、S総合病院の院内感染は「**換気不足**」が主原因であったように思われた。

解熱剤が免疫力を下げる・脳症を起こす

私が考える『**ウイルス性肺炎を重症化させないために**』の項目の一番下「**解熱剤・鎮痛剤を多用しない(飲まない)**」について少しだけ触れておきましょう。

★ インフルエンザ脳症は解熱剤が起こしていた

今から25年以上前、厚生省の研究班『**インフルエンザ脳症研究班**』がある結論を出していた。それは『**インフルエンザ脳症は、インフルエンザウイルスそのものとは関係なく、非ステロイド系抗炎症薬の解熱剤が起こしていた**』というものであった。「インフルエンザ脳症」という言葉は「和製語」で、当時、欧米には無かったという。

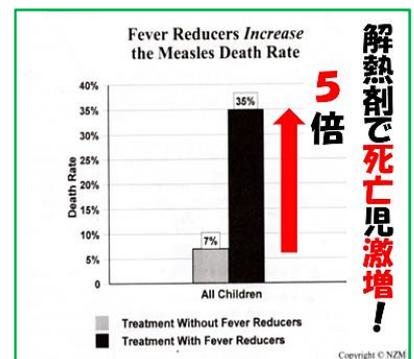
非ステロイド系抗炎症薬の解熱剤は、小児科領域では治療薬として

禁止されているが、昔は「**無知な医師**が子どもにも処方していたため、**脳症**が起こっていた」ということである。

★ 解熱剤で死亡率5倍に上昇 (Vaccine Safety Manual より)

今では「**ウイルス感染症に解熱剤を投与すると死亡率が上昇する**」という事実は常識のはずである。下図は、栄養不

良とビタミンA欠乏状態のため、麻疹感染による子供の死亡率が高かったアフリカ・ガーナ(1967~1968年)における研究結果である。アスピリンやサリチル酸などの解熱薬を飲まれた**投与群**の死亡率は**35%**と高く、解熱薬を投与されなかった**非投与群**では**7%**と低かった。また、発熱が高熱であればあるほど予後は良好であった。「**ウイルス疾患に解熱剤を投与しないこと**」(米国小児科学会)は常識となった。私たちの免疫システムは、自ら発熱中枢を刺激して体温を高め、**自己免疫力を最大限に発揮**しようとするのである。39℃以上ではウイルスも癌細胞も死滅するともいわれている。 **自己免疫力を培いましょう!**



★ 次号以降では、「**免疫の暴走**」「**サイトカインストーム**」「**抗体依存性感染増強**」などについて話しましょう。